

---

# 妖怪の山のバイト男

辻虎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖怪の山のバイト男

### 【Nコード】

N3915X

### 【作者名】

辻虎

### 【あらすじ】

アルバイトである若津皆人は

現代日本で生き抜くため、アルバイトを辞め社会人になる事を決意した。

そして第一歩としてとある会社に履歴書を送ったのだが………  
オリエ主、幻想入りです

## 01 - アルバイターの朝

鞆に大量の新聞紙を詰め、地を蹴り、冬の早朝を駆けている男が居た。

白い息、先日降った雪は道の端に集められ、一〇 以下だと言うのにマフラーも手袋も着けず、薄着な格好とボロボロの靴で男は駆けていた。

決められたルートを通り、尚且つ氷や雪に足を取られない様に男は寒い中、走り続けていた。

男の住むアパートはボロボロだった。

風呂はあるものの、一人が限界の狭い風呂。

木造の床はギシギシと悲鳴を上げ、何時天井が落ちてきてもおかしくないほどのボロアパートだった。

「ただいまあ」

男は一人暮らし、親戚、家族、兄弟も居ない、勿論彼女も居ない、生まれた頃から一人つきりだった。

中学に孤児院を抜け出し、一人必死に生きる為に始めた新聞配達も既に五年目、今年で歳に十九歳なる。

そんな男の家に見ず知らずの女性が居た。

「……………どちら様で？」

「いきなり無愛想な挨拶ね、若津皆人さん<sup>わかつみなと</sup>」

「何で俺の名前を？」

彼女は懐から出した紙をヒラヒラと皆斗に見せつける。

何処がで見覚えのある紙に皆人は眼を細め凝視した。

「俺の履歴書！」

履歴書、アルバイトだけでは生きて行けないと感じていたので一週間ほど前に出した物だった。

初めて書いた履歴書、不愛想な顔写真が貼ってあり、字も多少汚い。

「って事は……………」

「ボーダー商事社長の八雲紫です」

「すみません、こんなボロ屋で」

「いいえ、こちらこそ勝手にお邪魔したし」

「あの、粗茶ですが」

紫の前にお客様用の少し高め緑茶を出す、と言ってもコンビニや自販機で売っているペットボトルの物と同じである。

彼の家では最低、茶葉は七回ほど繰り返し使うので、カフェインが少なく寝る前には意外に好評である。

「大丈夫よ、私は七十三使い古した茶葉のお茶を飲んだ事が在るわ」

「二桁で五十越えって……………」

「金銭的な事には五月蠅いのよ」

「そうですか」

自分もボロボロの卓袱台の前へと座る。

コホンと咳を一つした紫は懐から出した扇子を広げ、口元を隠すと皆人に聞こえる音量で呟いた。

「合格」

「えっ？」

「採用とでも言いましょうか？ ボーダー商事社員として貴方を向かい入れます」

「……………」

持った湯飲みのお茶を飲まず、皆人は硬直していた。

「あらっ、不満かしら？」

「い、いえ！ とても喜ばしいのですが、面接とか試験とかそういうのは？」

「面倒くさい」

「え」

拍子抜け、今から面接でも始まるのかと構えていた皆人は胸を撫で下ろし、肩の力が抜けていく。

「ただし、条件があるわ」

「はい？」

「貴方が私達の世界でまともに生きて行けるのなら採用、無理なら諦めて貰うわ」

「いや、あの試験が無いつて言ったのは？」

「今思いついたのよ、如何する？ 特に取り柄も無く、この平穩過ぎるこの世界に納得する？」

「……………」

折角の申し出、態々こんなボロ屋まで、社長自身が出向いてくれたのに断る事など出来なかった。

「分かりました、入社試験受けます」

「……………真っ直ぐな眼ね、それじゃあ三ヶ月後に」

紫が指を鳴らす。

その瞬間、何も無かった視界の先に切れ目の様な物が生じる。

切れ目はどんどん大きくなり、人一人が余裕に入れる位に拡大した。

「それでは、行きましようか。貴方は今日外界からの縁を切り、忘れられた者とされるわ」

「ちよっ、アンタ人間か！？」

「あら、ごめんなさい。私は人間ではなく」

後退りの態勢を取っていた皆斗だが、自分の足元にも紫の入ろうとしているソレが在る事に気付く。

「妖怪よ」

重力に逆らえぬ人間は下に落ちるだけ、足掻いても下へ、暴れても下へ、謎の空間を数秒間落下していると視界に見た事も無い光景が広がる。

「何処だよこい」

自分が落ちる事さえも忘れ、現代の日本から想像もできぬ緑豊かな世界が皆人の心を奪ったのだ。

風を切る音が耳を支配し、他に何も聞こえない中、何故か耳に紫の音が聞こえてきた。

「ようこそ、幻想郷へ」

## 01 - アルバイターの朝（後書き）

主「初めての方、『家出男シリーズ』で面識のある方、どうも辻虎です。

今回は新作となっており、妖怪の山が中心です。

出ないキャラクターもたくさん出ますが、それでも温かい目で見守ってくれたら幸いです」

## 02 ニアルバイター川流れ（前書き）

初めて自分の作品を見てくださる方へ、

この作品の投稿は毎週月曜、木曜、土曜となっています。

偶に体調が悪くなり、休載するかもしれませんが、

2828パルパルしていただければ光栄です。

すまない……………今回も自重できない！



## 02 - アルバイター川流れ

「冷えますね」

「そりゃ、既に十二月だからね」

妖怪の山の山道、川沿いの道を行く二人の姿があった。

白銀の白い髪を風に靡かせ、マフラーと手袋でしっかりと防寒武装した白狼天狗、犬走椀と、防寒具も着けず、寒さなど感じていない河童の河城にとりであった。

「にとりは冬眠とかしないんですか？」

「今年の私は発明年越しでもしよつかなくて、一年中暖かい空気が私を包む様に『温かくなーるベルト』を……………およ？」  
にとりは足を止め、川に流れる何かを見つめていた。

「如何した？」

「うーん、何か変なのが流れてるよ」

川には何故か親指を立てた右手の様な物が流れていた。

「アレじゃないですか？ あのラストシーンに溶鉱炉に入って行く、体が機械の……………」

「あー、たぶんそれだと思っけど、何か違和感が……………」  
流れて行く腕の近くで空気の泡がプクプクと上がって行く。

「生きてますにとり、救助を！」

「オーケー、『のびーるアーム』行けえ！」

「ダイハードは1と2が面白……………い？」

目を覚ました直後、港の視界には白髪と青髪の現代から考えればありえない髪の色少女が目の前に立っていた。

「アレ？ マクレーンは？」

「おっ、起きた？ 盟友」

「め、盟友？」

「あ、眼が覚めましたか？」

後ろを向いていた白髪の少女がこちらを振り返る。

「何故こんな季節に川で溺れていたんですか？」

「やっぱね、4はCGに頼り過ぎなわけですよ、それに比べたら1と2は最高、あの人本当に毎年が厄年だなんて……………ああ、えっと、その」

率直に言うと言えはいいのかわからない。

翌々現状を確認すると白髪の少女はスタイルも良く、胸も手に収まるほどで犬耳と尻尾の生えたファンタジーの塊、小型の機械をドライバーで弄る青髪ツインテールの少女、大きい胸が視界に入る、普通の人だったら『何これ何処の喫茶店？』と言いたい。

「えっと……………」

「ん？ 自己紹介がまだだったね、私は河城にとり、この工房で色々作ってるよ、今は八十八？高射砲とか作ってるけど、見る？」

アハト・アハト、現代ではこの名前の方が認知度は高い。

明らかに人間一人が作れるものではない、ましてや小柄な少女がこんな物を作れるとも思わない。

「私は犬走椋、この山一帯の警護をしています」

「犬？ パシリ？ もみもみ？」

「斬りますよ？」

「すいません調子乗りました」

「俺の名前は若津皆人、外の世界から来たただのアルバイトだ」  
「あるばいたー？」

にとりは機械を弄りながら興味あり気に声を漏らす。

「決まった職に就かないで、色々な経験と知識を得る職業、まあ今は少し違うけど、今はボーダー商事に入れるかどうかの試験中なんだ」

「ボーダー……………ああ、スキマ妖怪の」

「解ってくれたか？」

「まあ、八雲紫が絡んでいるのなら大体は理解できます、でも何故川で？」

「上空三百メートルから滝つぼへダイブしました」

「大変だったんだね」

にとりがポンと肩に手を置く。

「はい」

「助けてくれた事は感謝してる、ありがとう、悪いんだけどさ宿屋とか無い？」

「人間の里にならありますが、今から行くと昼辺りには辿り着けません」

「まあ、妖怪に襲われなかったらね」

「妖怪？」

にとりは弄っている機械から手を放し椀の尻尾を掴んだ。

「ひゃうー！」

「こづいづの」

尻尾に頬ずりしたり、顔を埋めたりするにとり、椀は何か物凄く気持ちの良い表情をしていた。

「ああ、らめえ、そ、そこは感じるか、ら！ ああ、に、にひより、やめ……………」

「づりづりづり、ここか？ ここが気持ち良いんだろうー！」

「……………」

皆人は眼を瞑り、その場で座禅を組む。

意識を集中させ、他の事が考えられぬように瞑想を開始した。

「よし、許可が下りたぜ！ づりづりづりづりづりいいいいいいいいいいいい！！」

「ひゃ、らめえ、イクウ！ イつちやうううううううううううううううううううう！！」

「中々の弄りっぷりだね」

「おや？ 君も弄りの経験者？」

「バイトでは色んな人と出会いますからね、多少の弄りは出来ますよ」

「弄り談義で盛り上がりたないでください！」

前屈みになり、尻尾を押さえている椀が涙を流しながら抗議の声を上げる。

「少しやり過ぎたんじゃないですか？」

「まあ、良いんじゃない？」

「……………ですね」

キシヤーと猫の様な威嚇をし、こちらを睨みつける椀、皆人は宥める様に椀の下顎をゴロゴロしてやる。

すると次第に気分が落ち着き始め、犬が喜んでいる様に尻尾をパタパタと左右に揺らしていた。

「自分は何すれば良いですか？」

「ん？ そうだなあ、文の所でも連れて行ってあげたら？ 椀」

## 02 - アルバイター川流れ (後書き)

主「ダイハード四週連続とかマジキタコレ！ 海外の映画好きなん  
ですよねえ」

特にアクション物とか」

皆「働かないとホームアローンのDVD割りますよ？」

### 03 - アルバイターの職

妖怪の山、椈をお供に、にとりの工房からさらに上へと登り道中。

「『文々。新聞』……………中々本格的な新聞だな、俺は学級新聞程度だと思つてたんだが」

「絶対にあの人の前では言わない方が良いですよ」

新聞を広げ、険しい山道を歩く、皆人は足場も確認せずに足を進めるので数回転げ落ちていた。

「まあ、ここまで出来が良ければ十分でしょ、たった一人でここまで書けてるなら」

「まあ、私が手伝わされる事が度々ありますが」

椈の愚痴や、皆人の居た現代の話をしながらも足を進め、半時間ほど経った頃に目的地である家に着いた。

「ウッドハウス……………中々豪華な家をお持ちの事で」

木の上にある家、木には何表札の様に『射命丸文』と彫っていた。「ハシゴとか無いので、私に捕まって……………」

皆人は椈の言葉に耳を貸さず、アクロバットな動きにとりの工房から拝借したワイヤーを使い、木をいとも簡単に登り切った。

「人間ですか？」

「人間ですが？」

「失礼します」

椈を先頭にし、文の家へと入って行く。いきなり知らぬ顔の男が入ってきたら驚くだろうからである。

部屋の中は至って綺麗だが、壁に写真が万遍無く貼られている。

刑事ドラマに出てくる、バツ印がされている写真や、中には生着替え、スカートの中の神域写真もある。

「ですからして！ 私も一人の乙女であるわけで男性と同衾するの

「は些か無理があります！」

「異性を意識していいのは若い娘だけよ、私みたいな十七歳の……」

「貴方だけには言われたくありませんし、てか堂々と年齢詐称しないでください！」

部屋の奥で聞こえてくる二人の声、一方の怒鳴り声には覚えが無いが、片方の声には聞き覚えがあった。

「私はもう冬眠したいの、悪いけど後はよろしく」

「あ、ちよっと！ はあ………どうぞ」

不機嫌な声に呼ばれ、椀と皆人は部屋の奥へと進んで行った。

「ど、どうも」

頭を軽く下げ、部屋へと入る椀を先頭に俺は怒鳴り声の主の顔を見た。

第一印象は『鴉っぽい』だ。

背中から鴉より大きく黒い翼、得物を狙う鷹の様な鋭い眼光、綺麗だと言言葉も出てきたが、初対面の相手にいきなり言う事ではないので口を噤む。

「貴方が皆人さんですか、私は射命丸文と言います、お話は聞きましたよ」

彼女は誰かと言わなかったが皆人は誰か理解できていた、紫であると確信に近い物を持っていた。

「貴方は私の家で居候する事になりました」

「え？」

「そう言う事なのでよろしくお願いします」

彼女はそう言うと、家を出て、自前の翼で飛んで行ってしまった。

「はあ、困りまったわ」

素性が解らない今、あの皆人と言う人間には優しく接するのは危険であった。

これは素性や人柄が解らないからではなく、一つ屋根の下、知り合っただばかりの男女二人で暮らしていく事は女性にとっては怖い事だ。

相手は人間、実力行使すれば追い出す事など容易い、だがスキマ妖怪に弱みを握られている今、そんな事すれば確実に『伝統ブン屋』の危機である。

「まあ、様子見として一週間、それで何かしたら文句を良い付ければ良い話、ちよつとだけ辛抱よ」

彼女は呟き空を舞っていた。

「んで？ 紫さん、見てるんでしょ？」

「バレた？」

「バレてますよ」

スキマから上半身を出し、現れた紫、手に袋の様な物を持っていた。

「手荒い歓迎でしたね、真冬の川落とすなんて」

「仕方ないじゃない、だって眠かったんだし」

「はあ、貴方のやりたい事がイマイチ掴めないんですが……………」

「掴ませない様にしてるからよ」

何を言っても無駄だった、まるで初めから皆人の言う言葉を知らずに対策を立てている様な、何が飛んできてても対応できるプロだ。

「でも如何して射命丸さんの協力を受け入れて貰ったんですか？」

「簡単よ、ちよつとお願ひしたら簡単に引き受けてくれたわ」

嘘だと簡単に分かった、彼女のポーカーフェイスの裏に何か黒い邪気の様な物を感じる。

脅迫の他に何も無いだろう。

「ねえ、貴方は元の世界に帰りたい？」

「まだ来て五時間ほどですか……………まあ、帰りたくは無いですね」

「何故かしら」

「ここは綺麗な所です、その反面、現代では有り得られない恐怖や



冒険が待ってます。あんな腐った世界よりはマシですよ」

ゴミを見つめる様な蔑んだ目で天井を見つめる、その眼は怒りで満ち溢れている様な、恐怖に苦しんでいる様な眼をしていた。

「自分の居た世界を侮辱出来るとは……………何かあるのかしら？」

「『ある』と言つよりは『あつた』ですかね、男の過去は検索しない方が身の為ですよ」

「火傷でもするのかしら？」

相変わらずの無表情、だが紫の何かを知ろうとしている事を皆人は感じていた。

皆人は今できる最大の作り笑いをし、小声で呟く。

「さあ？」

### 03 - アルバイターの職（後書き）

主「俺も幻想入りしたいなあ」  
皆「変なフラグ建てるな」

## 04 - アルバイターに出来る事

アルバイトの基本は色々である。

接客業なら『笑顔』『手際』『キャラ』が大切である。

裏方業なら『技術』『技量』『手際』内容にもよるが、技が必要なのは理解して貰えただろう。

場所、時間、内容の全てを理解し、自分がすべき事をいち早く見つけ、行動する。アルバイト共通の初歩である。

「と言つても……………」

文の家は綺麗であった、写真や資料が散らかっている所は触らないのが鉄則、容易に動かし、相手の気を損ねたい為である。

「料理は作るとして、材料が無いな」

昭和辺りに導入された昔ながらの冷蔵庫の中にはそれほど材料も無く、元氣ドリンクらしき物、賞味期限の切れた野菜が散乱していただけだった。

「買い出しでも行くか」

外界の通貨はこの世界では売れるらしい、紫に頼んで貯金全額を下ろして貰ったが、大して多くはない、ゲーム機が三つ買える程度だ。

数年間頑張つて貯めた貯金がこれだけなのは理由があつた。

育ててくれた孤児園への寄付である、出て行つたとは言え育ててくれた親の様な物だったのでバイト代の半分は寄付をしていた。

「そのお蔭で生活はカツカツだったんだよなあ」

「そうだったんですか」

椀に頼み、山を降り、香霖堂へと買い物へ来た。

香霖堂、リサイクルショップとでも言えば良いのか、武器や雑貨、レトロゲームや今は忘れ去られた過去の栄光の皆さんがずらりと並

んでいた。

「待たせたね」

店主である森近霖之助が奥の部屋から出て来る。

「まあ、君は外来人だし、多少多く見積もつといたよ」

野口、樋口、福沢の三現神……………基三現金にお別れを告げ、売り払ったのだ。

「ありがとうございます、あの……………少しいですか？」

「何だい？」

香霖堂でお世話になり腰に黒い小包を下げ、里へと来た。

「何を購入したんですか？」

「ん？ ああ、まあ物騒らしいから護身用の為に武器の一つでも、これでも喧嘩は強かったんだぞ」

「そうですね、まあ、私が居る限りは危険な事にはならないと思いますよ」

「そうだと祈るよ」

里は賑やかだった、時代背景がごちゃ混ぜになっており、頭が混乱しそうだった。

現代風の服を着ている店があれば、和服に身を包む店もあり、現代からは遠く掛け離れていた。

「とりあえず買物でもしますか」

「そうですね、文さんは大抵何でも食べますが……………」

「すみません、鳥肉ありつたください」

皆人は椀の小柄で可愛い拳骨をお見舞いする事になった。

#### 04 - アルバイターに出来る事(後書き)

主「急いで投稿したから文に切れがないな………」  
皆「頑張れ」

主「もうちょい励ましの言葉何とかならないか？」

## 05 - アルバイターの和解

「はあ、如何しましょうかあの人間」

夕暮れ、朱色の空を自前の黒い翼で舞う文は皆人の事で頭を悩ませていた。

一人で勝手に飛び出し、皆人の件を放っておいて新聞のネタを探しまわっていた。

「まったく、厄介な相手に眼をつけられたわ」

ポケットから取り出した写真には紫、神奈子、永琳、聖、幽々子の密会写真。

これが今回の件の発端であった、この写真を使い『文々。新聞』の購読者を増やす事が目的だったが、何処から情報が漏れたのか、これを紫が『幻想郷五大老の密会』とかなんとか難癖を付け、皆人を押しつけたのだ。

「まあ、あのスキマ妖怪が進めるのなら問題は無いし、椀もわんこの勘とかで警戒していなかった……………一週間ほど様子見ね」

「……………」  
自宅に着いた文だったが家の前で息を殺し、そつと中を覗いていた。

「料理上手ですね」

「数年も一人暮らしだったからな、お袋の味ぐらいだったらちよつとは再現出来るぞ、『肉じゃが』『煮つ転がし』『野菜炒め』『ポトフ』、一番得意なのは『目玉焼き』」

「そこまで出来れば十分だと思いますが」

椀と皆人が台所に立ち、料理を作っていた。

まるで新婚の夫婦みたいな雰囲気醸し出しているので腹立たしい。



「いやあ、何故か食事中に涙を流れましたよ」

「何故でしょうか、懐かしい味に涙が流れました、玉ねぎとか入れてませんか」

「玉ねぎで涙が出るのは切る時だけ、あと、玉ねぎを切る際は鼻に詰め物をするか、口で呼吸をすれば泣かないぞ」

皆人の料理を初めて食べた二人は涙ぐんでいた。

「お袋の味って言うんだよねえ、最初の人は俺の料理食べると何故か泣くんですよ、『懐かしい』『心が温まった』とか言って」

食器を洗いながら会話を進める。

「俺、親の作った料理食べた事無いんだ、偶に近所の人が料理作ってくれるけどその味をすっかり覚えてさ、この味が俺にとってのお袋なんだよな」

「孤独な生活は苦しかったですか？」

「そこそこ、近所の人が偶に親切にしてくれたから大丈夫だった」

「へえ、と言うかその近隣の人を置いて幻想郷に来てよかったんですか？」

「良いの良いの、どちらかと言うと置いてかれたのは俺だから」

「えっ？」

「それより、椀、帰るの？」

「はい、ここに居ると尻尾を撫でまわされそうなので」

尻尾を押さえ、文を警戒しだす椀、文は手をワキワキと厭らしく動かし、戦闘態勢に入った。

「文さん、そこまでにしましょう、また明日触らせてもらえば良いじゃないですか」

「そうですね、明日は首輪を持って行きましょう」

「趣旨変わってないか？」

夜の妖怪の森に笑い声が響く。

空に散らばる星は地を照らし続けていた。

そして男の幻想郷での生活の初日も幕を閉じかけていた。



番外編 - アルバイター秘密の夜その一

「寝たか……………」

皆人は文の就寝を確認すると外へ出た。

夜を照らす星空の下、皆人はポケットサイズの日記帳とペンを取り出し、星明りを使い、日記帳の最初のページに何かを書き始めた。

『十二月一日

香霖堂で購入した日記とペンに今日から一ページずつ日記を付けようと思う。

幻想郷はとてもいい所だ、問題無く日々を楽しく過ごせるだろう。今回付ける事は幻想郷での生活についてだ。

妖怪と戦闘に入った時、どう対処すればいいのか。

紫さんにも話を伺ったが、眼には眼を妖怪には妖怪をと言う事だ。どうも彼女は少し抜けている点がある。

現代での生活は醜い物だらけだった、

せめてこちらではマシな生活を送りたい。

追伸、アルマゲドン見たかったな』

「この位か？」

日記帳を閉じ、ポケットへと突っ込んだ。

「月が綺麗だな」

幻想郷初日、衝撃と環境の変化の所為で何故か寝付けない、未知の世界に興奮しているのか、明日から妖怪と共に送る生活に怯えているのか、理由は解らなかった。

「退屈はしないと思うけど、まあ、自分次第か……………」

ただ一つだけ、理解できる感情があった。

絶対的な孤独感、別に寂しいわけではない、だが顔見知り居ないだけで心に穴が開いた様だった。

「ちとと.....明日から頑張る為に寝ますか」

## 05 - アルバイターの和解（後書き）

主「昨日は良かった、特に飛行機が空中ではじけ飛んだ時が」  
皆「オイ、執筆しろイピカイエ」

## 番外編・アルバイター秘密の夜その一

「寝たか……………」

皆人は文の就寝を確認すると外へ出た。

夜を照らす星空の下、皆人はポケットサイズの日記帳とペンを取り出し、星明りを使い、日記帳の最初のページに何かを書き始めた。

『十二月一日

香霖堂で購入した日記とペンに今日から一ページずつ日記を付けようと思う。』

幻想郷はとてもいい所だ、問題無く日々を楽しく過ごせるだろう。今回付ける事は幻想郷での生活についてだ。

妖怪と戦闘に入った時、どう対処すればいいのか。

紫さんにも話を伺ったが、眼には眼を妖怪には妖怪をと言う事だ。どうも彼女は少し抜けている点がある。

現代での生活は醜い物だらけだった、

せめてこちらではマシな生活を送りたい。

追伸、アルマゲドン見たかったな』

「この位か？」

日記帳を閉じ、ポケットへと突っ込んだ。

「月が綺麗だな」

幻想郷初日、衝撃と環境の変化の所為で何故か寝付けない、未知の世界に興奮しているのか、明日から妖怪と共に送る生活に怯えているのか、理由は解らなかった。

「退屈はしないと思うけど、まあ、自分次第か……………」

ただ一つだけ、理解できる感情があった。

絶対的な孤独感、別に寂しいわけではない、だが顔見知り居ないだけで心に穴が開いた様だった。

「さてと……………明日から頑張る為に寝ますか」

番外編・アルバイト―秘密の夜その一（後書き）

主「『裸Yシャツ真理教』か『裸タンクトップ正義教』………」ど  
つちを立ち上げればいいと思う?」

皆「何考えてんだオイ! 執筆しろ!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3915x/>

---

妖怪の山のバイト男

2011年10月20日08時22分発行